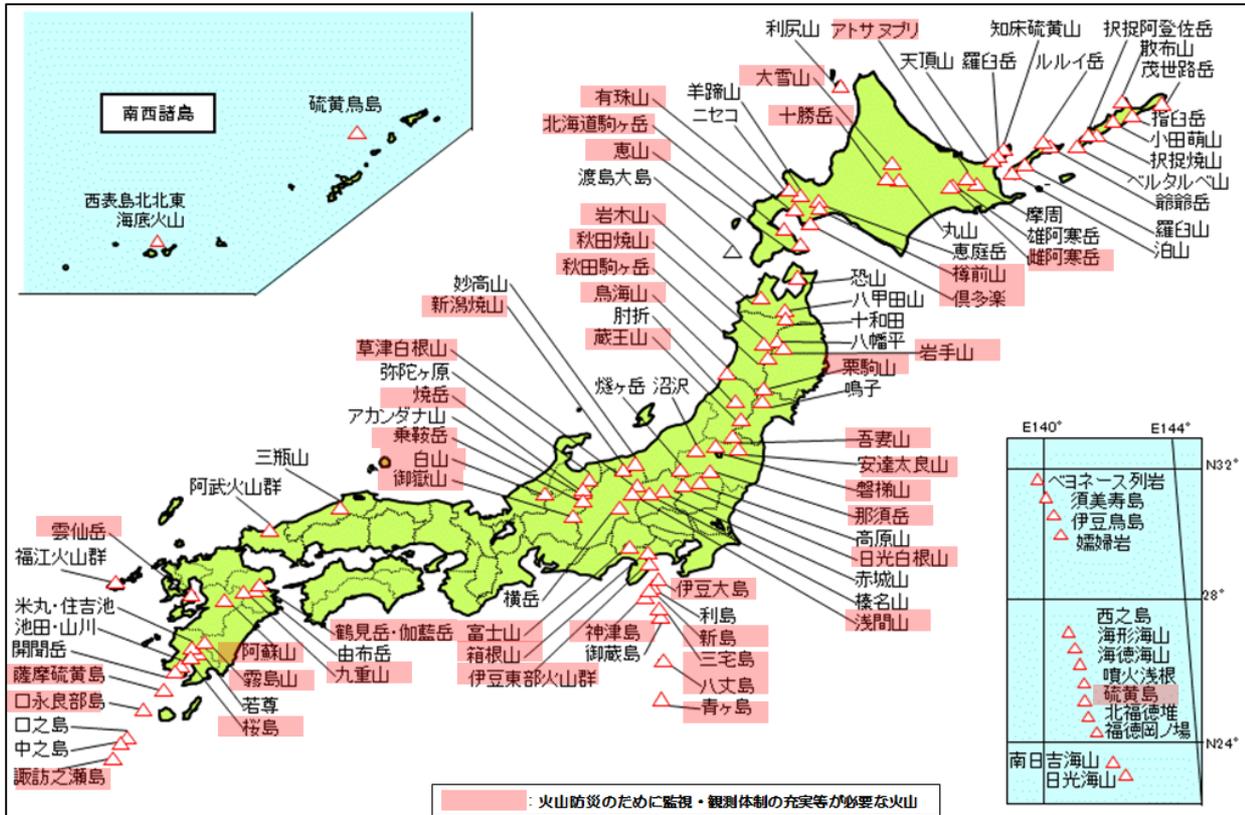


# 地震一口メモ No.113

## 火山灰による災害について ～『量的降灰予報』の提供に向けて～

気象庁は平成27年3月から『量的降灰予報』の提供を始める予定です。火山とその噴火にはあまり馴染みがない大阪でも、火山灰の影響を受ける可能性があります。

平成15年に火山噴火予知連絡会は活火山の定義を「概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」としました。そして、噴火記録や火山噴出物の調査などから活火山の再選定をおこなった結果、平成26年9月1日現在、日本には110の活火山（全世界の約10%）があります（図）。



火山灰とは、火山の噴火により噴出した小さな固形物のうち直径2mm以下のものです。時には数10kmから数100km以上運ばれることで広域に降下・堆積し、農作物の被害、交通麻痺、家屋倒壊、航空機のエンジントラブルなど、広く社会生活に深刻な影響を及ぼします。今から約100年前の1914年1月12日、鹿児島島の桜島が噴火しました。この噴火は「大正大噴火」とよばれ、約60名の死者を出しました（「日本活火山総覧(第4版)」(気象庁編 平成25年)による）。気象研究所によるシミュレーション結果（日本地球惑星連合大会2014年で発表）によれば、桜島が100年前と同じように噴火すると、気象条件によっては、全国各地に火山灰による影響が広がるおそれがあることがわかってきました。このとき降り積もる火山灰の量は、大阪市で1mm程度、名古屋や東京で0.1から1mmとされています。数字としては小さく感じるかもしれませんが、1mm以上の降灰で、健康な人でも目・鼻・のど・呼吸器などの異常を訴え始めます。また、路面が完全に火山灰に覆われるなど視界不良のための車の通行規制、がいし注)への灰付着による停電発生、ろ過困難による上下水道の給水停止などのおそれがあるとされています。

注) がいし：電線とその支持物とのあいだを絶縁するために用いる器具。

『量的降灰予報』の詳細については次号以降の一口メモに掲載する予定です。